陳　述　書

2024 年 1 月 17 日

福岡高等裁判所　御中

住所　福岡市西区
氏名　鐘ヶ江　進

アメリカ先住民ホピ族によれば大地に災い（放射能物質）が閉じ込められて生き物が誕生したとの言い伝えがある。まさに現代は、原子力の扉を開いた時代である。命を奪う可能性がある原子力とどう向き合うかが問われている。私は、退職まで高校の教員で理科を担当していた。アメリカ，スリーマイルでの原発事故、ソ連のチェルノブイリの原発事故を知り、日本でも原発事故は起こりえると確信し原発の危険性を知らせる活動も少しはやってきた。原発の開発・再稼働をすべきかどうか人類は大きな岐路にたたされている。

１.地震列島である日本に原発は安全に運転できるのか。

日本はプレートが４つも入り乱れる地域である。地震も絶えず起こり、津波の災害もある。まさに今年、能登地域での今年の地震は予想を超え対応ができない事態になっている。直下型の地震もある。断層はどれだけあるのかわからない。断層の上に原発があれば危険性ははかりしれない。

地震の巣窟日本に原発を造るのはとても認められない。海外の原発は地震が起きにくい地域に造っている。

２.原発災害の規模の絶大さ

2011 東日本大震災の時、菅首相は東日本の壊滅を一時想像していた。アメリカの軍隊や政府関連機関は日本を離れて、一時避難した。原発が同時に４基メトルダンしたら想像を絶することが起こる。この時に対処することができるのだろうか。放射能の濃度が高ければ活動はできない。そうなれば、事故に対応ができない、東電も幹部は現場からの撤退を考えていたのではないか。その時日本はどうなるのか。その可能性と向き合うことができるのか。

３.安全性の神話

日本の原発は安全という神話を東京電力も他の電力会社も政府も言ってきた。マスコミも追随した。批判に耳を傾ける謙虚さがない社会風土の中で、2011 東日本大震災と同じ規模の事故は起きないだろうか。安全神話を信じるとリスクは軽んじられ、経済性が優先される。リスクを優先し事故を回避する思想を日本では考えられるだろうか。地震学者も、原子力規制委員会も大地震の時の安全は保障していない。

４. 被曝・放射性物質の拡散の現実

原発を稼働させるためには、莫大な人力が必要。その過程で労働者は被曝する危険がある。命を削る産業が人類には必要だろうか。大事故になれば莫大な放射能が拡散する。日常でも原発からは温排水、放射能のゴミ等が絶えず発生している。温排水は莫大な熱量を放出している。環境に影響があるが正確に、影響を把握できているのだろうか。地球温暖化にも影響を与えている。

５. だれが命を投げ出す命令を出すのか。

水俣病、東海原発臨界事故、薬害エイズ事件のとき、どこも責任をとらず解決まで長い年月がかかった。原発の大事故の時、誰がどのように責任を取るのだろうか。過酷事故になったとき、誰が命を投げ出す命令を出すのだろうか。出さなければ日本は壊滅するかもしれない。

６.大都市に原発を

電気が必要と思うなら、大量に電気を必要とする大都市につくるべきだ。事故のリスク考え都会の人が判断しなければならない。原発の廃棄物も安全ならば大都市で保管管理すればいいのではないか。未来の世代に原発の負の遺産だけ押し付けてはならない。

以上、６の視点から考えても、原発は必要ありません。原発事故の夢をみる現在の世ではなく、安全な世界を実現してほしい。人類の英知となる判断をお願いします。

2024 年 1 月 17 日　玄海原発行政訴訟控訴審　第 8 回口頭弁論　控訴人意見陳述

玄海原発プルサーマルと全基をみんなで止める裁判の会